

KODAK  
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



三二一

菟玖波集

2110  
I



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23

門利5  
號 2/10  
卷

特



夫和歌者兩儀剖判後萬物未成年傳自  
神世迄于今代既聯章句漸整文字分風  
賦比興雅頌之六義呈長短旋頭混本之  
諸弊是以詞林益著華麗之艷思泉源添  
芳潤之流然連歌者其言約其旨遠義歸  
周詩弊合和歌蓋日本武尊平蝦夷嘆菟玖  
波之艱難中納言家持寄言於梓川水業平  
朝臣停情於逢坂關天曆御門遺疑旨滋野

藤野濤氏遺愛

明治二十一年四月廿九日  
藤野濤氏寄贈

倉持氏印

內侍北野天神造天御戶漸舊皆足理入幽  
言事通神妙者也中葉降雅詠愈轉篇計  
相聯四時之景象莫不形容萬慮之情性莫不  
吟詠匪啻述日域之風俗剽採漢家之故  
事然則代々聖主加之撰集家之前修備為  
作軌範或詠花下或嘯月前之輩美譽言  
雖垂後世住勾不傳遺音嗟呼惜乎而今  
華闕風融京洛依陽和之仁柳宮露篇遍邊

蕃被天均之惠民美教化成孝毅爰本飾幽情  
常綴微詞或諷諭之媒或為教誡之端賢愚致  
誠尊卑以陣心無不審詞無不通茲以且讀夕覓之  
暇感片文隻字之志述而不作名曰菟玖波集  
不分古今之作不擇上下之句其數二千有余雖  
鄙俚詞貽來哲之嘲舉手於雖鄧鄴林終攀一  
枝高自於崑山遍拾片玉譬猶窺天以管測  
海以蚤方度幾傳縉來待能者于時文和五年

三月廿六日編<sup>本マ</sup>織已畢尋菟玖波之道<sup>愛</sup>佐保  
川之流云尔

やうにうらふれぬまゝに地おしむ事しんまをたれん



ちよやゆ海神代小つにちとせりし一も人なれまをゆと

成る我を白を能の一文子たれさる中終りて世は風成

比雲の雅碩乃びくをなとあら長姫旋頭混中のかく

乃あうを定<sup>定</sup>しんを調乃念をありきい思ひの落

いあうをれくあゆあるかしきつ海千まを歌つま

わり平旨ひ詠くし文はかやうらるる歌のさきふ叶

日本武尊の夷の乱をやはらけて清くりのこをりしけ

智と信をあつゝ中 幼云あ待は信保川より水小浦うら  
ぬ心をのへ業平御旨は雪坂の関に情をく免天曆  
御門を信野内侍にみこ夢の心を結し北野天  
神をうあまは戸御行をを法けあひき中法を  
此方厚に玉章書法に子あ一の志る子のちく續る  
子からふ心は善をもくあひ子親を待月をぬる  
雪を詠るも公回より季ふくこ言あまは結句小能く式  
悉結子中より式は身をうらむ君をいふ神をうやま

ひ仙を仰く結る子死にやまもも海に一人法る  
る世法まももすらく結る公にふ小此にといふ子なん  
かのうけ<sup>る</sup>代は結聖結は代も撰集ふく入家結  
道をえよあ人も式目を化し久しく雪のく一の道を  
ひ善のう結る子死にやまもも海に一人法る  
ける結もあつ結る結る結る多くひ雪井のく  
多うあといつても伊勢の海のちあはる玉ひ結る集る  
く欠しあくかく和詩る浦の原塩草かき並る家

崎す水千がんあをる家志のあ家を今も無つ風はさまり  
柳を子露あす糸くく天ふの草木とも志千あふ  
多くいひおちる中ぬもこねる千の我をんはのかき惜をいし  
化ふるこねるをせねるをつて糸を家文をうまけ武をや  
いけ民をたしあふたのうとせしんがこなきを後ふふ  
糸をあそんぬるのきいやふをまは思ひをの帰家  
こねる小ながいさるさる風的情をよさる山陰もがく  
露のこねるはあふらさ糸木陰もがくのうらさし雲千

且千讀夕小まふ糸あまを糸いと手あくおしとへ  
糸も道小婦け糸心さし小ふ糸いこ糸あはるえん露  
玖波集といつり糸くく今をまの糸あま志もの句を  
家志糸糸く糸糸糸あま糸こ糸のた糸糸  
糸をうらま後のお糸糸ををいといつ糸もめ糸糸  
得糸糸をま糸の千志糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸  
い糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸  
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

ちふーく今拾ひ集へ海に魚の類其れあくるし  
誠千貫をもて天津堂をうけひ<sup>蠶</sup>  
蠶音里昨屠首荀子曰以蠶則海  
をもとくして海をまのらんこ<sup>蠶</sup>一<sup>志</sup>あはれとも此  
事をかゝりて代々千<sup>蠶</sup>一<sup>蠶</sup>之<sup>蠶</sup>をかくか<sup>蠶</sup>らむ  
ち<sup>蠶</sup>い<sup>蠶</sup>や<sup>蠶</sup>一<sup>蠶</sup>き<sup>蠶</sup>る<sup>蠶</sup>り<sup>蠶</sup>は<sup>蠶</sup>と<sup>蠶</sup>は<sup>蠶</sup>ま<sup>蠶</sup>る<sup>蠶</sup>き<sup>蠶</sup>て<sup>蠶</sup>あ<sup>蠶</sup>け<sup>蠶</sup>る<sup>蠶</sup>亦  
く<sup>蠶</sup>を<sup>蠶</sup>後<sup>蠶</sup>ち<sup>蠶</sup>海<sup>蠶</sup>心<sup>蠶</sup>を<sup>蠶</sup>ま<sup>蠶</sup>る<sup>蠶</sup>あ<sup>蠶</sup>ま<sup>蠶</sup>き<sup>蠶</sup>へ<sup>蠶</sup>習<sup>蠶</sup>き<sup>蠶</sup>み<sup>蠶</sup>こ  
舟の<sup>蠶</sup>も<sup>蠶</sup>ち<sup>蠶</sup>か<sup>蠶</sup>す<sup>蠶</sup>く<sup>蠶</sup>ら<sup>蠶</sup>海<sup>蠶</sup>号<sup>蠶</sup>り<sup>蠶</sup>果<sup>蠶</sup>る<sup>蠶</sup>巨<sup>蠶</sup>毛<sup>蠶</sup>神<sup>蠶</sup>を<sup>蠶</sup>合<sup>蠶</sup>あ<sup>蠶</sup>ふ<sup>蠶</sup>  
あ<sup>蠶</sup>つ<sup>蠶</sup>海<sup>蠶</sup>心<sup>蠶</sup>を<sup>蠶</sup>得<sup>蠶</sup>る<sup>蠶</sup>舟<sup>蠶</sup>の<sup>蠶</sup>如<sup>蠶</sup>く<sup>蠶</sup>し<sup>蠶</sup>時<sup>蠶</sup>文<sup>蠶</sup>和<sup>蠶</sup>五<sup>蠶</sup>年<sup>蠶</sup>之<sup>蠶</sup>月

廿五日<sup>蠶</sup>ちん<sup>蠶</sup>志<sup>蠶</sup>海<sup>蠶</sup>一<sup>蠶</sup>終<sup>蠶</sup>也<sup>蠶</sup>海<sup>蠶</sup>を<sup>蠶</sup>ま<sup>蠶</sup>る<sup>蠶</sup>ま<sup>蠶</sup>る<sup>蠶</sup>い<sup>蠶</sup>道<sup>蠶</sup>を<sup>蠶</sup>い<sup>蠶</sup>や<sup>蠶</sup>一<sup>蠶</sup>く<sup>蠶</sup>あ<sup>蠶</sup>  
か<sup>蠶</sup>い<sup>蠶</sup>い<sup>蠶</sup>ふ<sup>蠶</sup>一<sup>蠶</sup>つ<sup>蠶</sup>を<sup>蠶</sup>思<sup>蠶</sup>ひ<sup>蠶</sup>た<sup>蠶</sup>を<sup>蠶</sup>い<sup>蠶</sup>い<sup>蠶</sup>も<sup>蠶</sup>つ<sup>蠶</sup>く<sup>蠶</sup>を<sup>蠶</sup>如<sup>蠶</sup>道<sup>蠶</sup>  
を<sup>蠶</sup>ま<sup>蠶</sup>る<sup>蠶</sup>い<sup>蠶</sup>修<sup>蠶</sup>保<sup>蠶</sup>川<sup>蠶</sup>の<sup>蠶</sup>み<sup>蠶</sup>ふ<sup>蠶</sup>も<sup>蠶</sup>心<sup>蠶</sup>を<sup>蠶</sup>ま<sup>蠶</sup>る<sup>蠶</sup>ま<sup>蠶</sup>る<sup>蠶</sup>流<sup>蠶</sup>を<sup>蠶</sup>う<sup>蠶</sup>け<sup>蠶</sup>を<sup>蠶</sup>心<sup>蠶</sup>  
云<sup>蠶</sup>り<sup>蠶</sup>ま<sup>蠶</sup>る<sup>蠶</sup>也<sup>蠶</sup>



菟玖波集 第一

春連詩上

寶治元年八月十五夜百韻連歌子

山ノ侍志保子雪ヲ吐ク浦ト侍々々

後嵯峨院御製

あゝ玉ヲ奉ルホヘキ海邊道ナレヤ

とらえぬ事婦ととらふ事不保の如

前大納言為家

春をまよふ海邊道ナレヤ

山の握井坊々々る韻事ハ歌侍々々

か枝由亦不保無志々然々々波

二品法親王

雪まらる道長保山無成々如保不

月ノ侍實々々お之無更々々水

前大納言為家

初春ハ百韻ナレヤ



お大臣千侍し時家の万韻連歌小  
善お抄けお歌山里お善と  
ソふ句中

おをを心お殿千お歌松乃五  
うらお善お歌浪中善さく

道善法師

お山を殿千もおを二四千うへ  
船歌の跡乃山をいつくお

救濟法師

お系お時りおをえしおのあ  
立お山を殿乃袖お程さあ

後深州院少将内侍

うらおをかおをの善お明おの  
舟歌の末お浦もを程あ

多窓園師

うらおをさお歌のあお一

たう袖うけく風あきふん

前大納言為氏

さね船ろくあもね衣あきらあさし  
後多の院市時白黒紙物の事記  
あきしきふあ年

しめ子うかきくきいもまきひえ

従二位家澄

さあめといしりい山願ふきくあき

弘長二年いふ院の庚申す額連記

の申々

あめね月ハねかね年額うらさ

福光院入道前関白  
大納言

十善ね香き年さあはせか若

あさ甘り路風さむく香障ふあ日内かま  
かろくゆき後院年書く試少清か細  
局小きしあき付ふあ

前大納言公任

あこー 春と秋とを  
と侍々 清少和玄

あささる 花ふやふふん  
春あつらふ年をりぬも  
侍々

尤近中将義詮

雪乃枝平も 匂あむ色々々  
常在院 少くも顔赤く侍々  
身をさらけと 頼とる我

源頼章朝臣

枝々枝々 老木の梅平 美咲  
野家不消え 煙の跡 雲あふ

兼大僧正賢俊

此山里 無かなる 乃侍々  
埋市あつらふ 春をくみき

権僧正永運

岩川の瀬のふ波 雪溜

嵐乃音能さへくえぬ我ら

兼意法師

月千尺能雪をきき去る端やを  
培ひをうりて又由は松をら

性道法師

山あまをこゝろのく忍千雪降を

道あゝの路野し我をさる

陀阿上人

山本能妻軒端千夜に照を

むふも中千も角を社を

野阿法師

住吉ろ浦を妻あはし由

あまをぬ身は去るを

素阿法師

山里の雪をきく道なく

花ふる梢も高ふを松

源顯氏朝臣

十才小色たさ婦あけかのもかし  
西院平の之依まふの比くさる

源頼氏

深山中をこほりたともふき雪ふふ  
園くも柱ふー春ふや成りぬらん

周阿法師

伊勢かーはまきあじ浦の明かの

若新小川や水まきうた 覽

前大納言お家

山ゆのききき新う雪ふ下きらん

新うやあきも古御乃き

後光昭院前関白  
老大臣

後うへー主しも知ぬ梅咲き

新あきや山とる立ぬらん

後鳥羽院御製

平賀千亦治ふ平賀乃平

建保五年四月院の庚申万歳

平賀乃平

平賀乃平

從二位家隆

平賀の志は婦家平賀もいふ

平賀乃平

後二條院御製

梅。平賀乃平

公乃身も平賀乃平

前關白左大臣

平賀の梅の口き平賀乃平

いささ平賀乃平

六條門大臣

平賀乃平

里あは平賀乃平

前大納言氏

難波乃むくの句の夕暮

糸もさぢふ雪の聲

二品法親王

梅系を美由也の如風吹云

北野社千句連詩

我も老木如美の下親

殺濟法師

松ふふ梅乃心小風吹云

かど木如くは花の咲き云

道守美云法師

梅のえがさのくは福の美もかく云

寛元四年三月法勝寺花下

少く

上つち清くかといぢく心ふと云

句

兼美法師

梅 花の下のうら

寛治元年三月三日此州の寺

花の下にうら

梅の花のうら

無生法師

新中 花のうら

新中 花のうら

法印 禅陽

其 花のうら

花のうら

源頼康

三月の西のうら

花のうら

後深州院女将内侍

月やむら

花のうら

花のうら



日——を井乃をを遊しき

後宇多院御製

老の身平を安んずるは月か空か、月を

おぼゆるくや赤くはあらん

関白より大臣

月霞をくはるるを少成小成を

老の老ををを許るるこゝん

二品親王

混少をくはるるをの老くはるる

をくもをくはるるを安んずる

権大納言良光

出おのほの老をくはるる山くはるる

老をくはるるをくはるるをくはるる

藤原俊成朝臣

老をくもをくはるるをくはるる

法勝寺花下蓮歌子

たくいもあし梅の初花

良心法師

種ふあしそ是朝陽ふは清いそ

そふのそは清くそ物いきそ

信照法師

朧 かがとも月を待ついや

そも未ふ依東路の山

本照法師

月霞むさよ姑まろそ聞く

時のまはまわむじふ成ぬん

前大納言お世

たもあけあむはる月

つむさき物やあそふ

前大納言お世

らぬもやそ独り集り

たらしそそ集りそ

殺海か〜

まふやうんふのふたねり

ふたねり松山信やふあひん

木態法師

鐘 ぐんさうきんぬ〜 去の夜

五時のふあひ枕ふ鐘聞さ

前大納氏忠

別 か〜き 去の夜 ねり

殿ふふもねりぬ 不二の松小

前中納氏経

<sup>かま</sup>たふいもあ〜 明か〜 去

たふいぬふをむ〜 成り候

源三官朝臣

去ねりいた〜 一時 去あけさ

ふあひぬ物〜 小か〜 去りの新

蓮智知し

海より来る舟もあはれもあはれ

山本やまもとをゆく舟もあはれ

贈系親新

おちのちのあけの舟は舟

花もも先づわ人の立寄り

鳥借重成

舟をりきぬ衣のうらみの舟

寛治元年の二十五年の額

寛治元年

むすしとく人小名跡をまのし

後深州院少将内侍

おのゝ心と帰家原の音

後光厳院前關白左大臣家万額

東の歌

おちのちの舟もあはれもあはれ

忠房親王

舟の音もあはれもあはれ

行ともなはれぬ道ありや

後宇多院御製

わ井新屋もよわ知らん

伴雪誠路小控白跡らん

常盤井入道前平

あふかくくく歌者の房子

おまゝのこゝちも新うら

勝原家尹朝臣

大いなる石の房の跡らん

おまゝらん歌の忠告たか一寸

まゝの新屋もよわ知らん

あゝまゝらん歌の忠告たか一寸

六條前内大臣

柳枝平新もよわ知らん

室法三年毗沙門堂をのららん

よ新もよわ知らん

導生をすし

いぢあひく柳、枝が永き糸

西和元年二月法華寺千句小

善も老木のまゝふこぢり

善阿をすし

枝のうね柳の眉乃うす 縁

直染法正舟に雲居小竹小竹

権少僧部永運

水乃、きりぬきや柳をあらん

いのちのまゝくじり社永け禮

殺海法師

白露の玉が物を降らす

まがねは坂子のまゝ消す

西園寺入道右大臣

まのまがねは坂をたがす

法華寺千句をす

あゝおのゝこをたふししつせを

善阿を

うまふ烟を竹乃ふも元

前右細言實教

直木好戸の嵐のまゝ長宗少く

建保五と申四と申万勲ま

いつまは浦を祿よく

後多の院御製

深きとをたふかやのうま烟

善哉うまかけの杉原

關白前大臣

たふは山小ちくもくれや

文和三年七月うへのおのこ

歌つふまはるる

草も木も日一をたふし

今上御製

野山の春もこの園如春

おふーまの歌

日影のやがまむつふしの月

お昼のさつむも分る美をさる

おふの依里のさるりやじき

尤近中将義詮

うへたーき美のさるりと魚をさる

正和四年五月初り方額をさる

こたりのさるり法をさるぬ。公のさる

伏見院御製

軒の梅のさるりぬのさるり

弘長二年八月院の百額をさる

行る所をさるり井のさるりぬのさるり

山階入道尤大臣

の春あはれ里のさるりぬのさるり



大下州新大官人のあはれ衣

兼中納言白家

一夜雪あけぬ花より六姉

亦も我髪海ありぬ名跡を

後醍醐院御製

志保一らす十若新あはれ花の信

公のうきふぬまはる衣 袂

花山院入道藤右大臣

花より志保くやると胸あはれ

やうい海山并花や散らん

兼中納言白忠

ぬまももる年きりぬさうす將

法橋寺千句連歌小

おま新葉あはれ入相らん

順慶見物

い我河はぬ花の帰るはるはあはれ

たしふまきこや夕々しき

性尊法師

山里子月山海まきと世と見え

かゝるやうにやれまきの三日月

良阿法師

小車跡半を花ふかくまき

うまき又をを漏るる

十佛なり

山里を花にくと我むしき

北山の花を帰る侍をう

お小枝の枝をう一葉の大枝を

よ侍りあふさきおちる

女おこあゆ

やさしくいふ花うはか

いひ侍り馬をう

勝原基政

武士やさくめしを帰る

いつらうが備かきりる海うか

藤原隆経朝臣

様千のしほ 峯如 白也

かきりる海原の一行

兼胤法親王

花のこぼりし人のおしり

紫如戸まきりるもきりるのち

藤中 功と光

心を操り美千嵐如とよき

くら如 美千松と世世

権僧正良胤

月如の花ふり山如朝 関

こち海 関如 美千とよき

源 島 秀

松原や美のこちとよき

いりしへのちか公小かつり来ん

福阿上人

老 亦多 善もま 少中 二我 吟  
おもぬ ころ なく なき 我人

殺 隣 法 師

善 中 行 心 や 我 を け ず ぶ ら ん  
さ ころ ま ころ う 心 を お う 法 山 風

道 子 笑 々 斬 一

か ぶ 人 の 名 跡 も 花 の 夕 小 事

山 踏 の ま ち や 我 名 の 二 海 人  
関 白 や う 大 臣

か ぶ ろ う ま ころ ころ あ も ら ね ころ 小 善 と ころ

ま ち ころ ころ ころ つ も 花 の 心 小 事

二 品 法 親 王

こ 海 一 時 如 善 我 来 く かな  
ま ち の 心 小 事 の 我 ころ ころ 海 人

花園院御製

花乃くはくく水のくもさ井

上東の院中室より上は時上は局  
小住せぬは花をまくとくは勝原  
道信朝臣山以をたを市兼の内へ  
さし入侍とて

勝原道信朝臣

くちがーやちーかやちーか深とたり

伊勢大輔

木川あもいりぬとふの色哉

馴来くもたふくく色とぬらん

太宰権帥俊實

今好やちち木いへおきー花

いしへぬや香おも跡や竹ぬらん

南仏法師

匂いもたしふ花のささあ

山里好夕い月小葉ふらり

前参議宗平

美らけしとわかをうすじらん  
西院之依山やちとく成らん

権中納言公雄

白雪のいふ花ももへりこのに  
元享二年南庭の花のうけを  
人々を驚かすまはるる家小

いま紫一への春のたもけ

後醍醐院御製

月うけ<sup>キニ</sup>をうけしの花のうけ上

かき思ふもまはるる家小

前中納言相

散ぬる風ふく<sup>キニ</sup>花を以て  
やうやう<sup>キニ</sup>かへいともを待らん

内大臣

山里花の散る人といふ

建保五年四月院の御製の  
建保五年

きく花一ふり生約の筆をん  
花中納言  
おろろ花のそら一

菟玖波集卷第二

春連詞下

多き心のうは花と一子

前大納言為氏

色きくもくそあ、お花様

後多の院市時万顔重歌在り

同一妻也都子も、川

西園寺入道前大臣

とー 野山花さくく戸の明くく

口ー 連歌るる四下

夕う月のまに祢ね露ふやあふひそ

後多和院御製

花子二花ふふ多花かきね花ら

元享三年四月二日山屋る韻連歌

春行末のまきき道をおいせく晚

後宇妻院御製

花を身あはれ系 志賀の山哉

あー 引乃山カノミを遠く さま ころふ

後深州院が物侍

公 皇と花子あはれはー くらむ

西和四年六月二十一日る韻連歌下

くし行のまの音あかふしな

伏見院御製

花きー 依ひりくね鼠吹おひそ



春のけしきは年を嬉しむ

常盤井 入道 太政大臣

ふさぐの花をえりきあはれし

あはれしは 朝服室もあはれし

後光 暁院 前關白 太大臣

花はひのり月夜にさす

夢も現も思はず

道 朝法師

春のけしきは年の枕

花の院入道 右大臣 花のけしきは

山里の夜にあはれし

つらき世にあはれし

といふはれし

野 阿法師

春のけしきは一夜もあはれし

あはれしは

救 瀝法師

花の三條山好梢千月

とふらふらも枝の下道さそる暮乞

導巻法師

をり千あそむふ山ろ端ろ月

二ふ初ま花の頃西芳精舎吉少

まじりし一付たろふ

開乃西院千夜ニ花明如也

素何ちし

月もぬ花ろかけ入臈小る

むし好まふかろくさり電

素何上人

くへの名一花も老木小まる

まを煙くニ花古々無る也

勝原信勝

植並し人を花も思ふし

かけハとく人か名跡もとも思ふ

権少僧都永運

るまかくと花に花ぬれ

わふに花山の真も志らるる

権少僧都俊宗

花や心を空にかなん

旅祢あはれ受ふに閑もなる

法眼良澄

公解むに花のふりて

節をこの心あきし

法印弘惠

まに咲ぬまのよきをうへ

やもまも色く

さき市に花の喜まの松と

いきちるに

中州忠嗣

花と冬宿の木末を以て

高野如浦ま如浪か子ま  
照海上人

杉こ一本花ふをかり法こまへふこ  
其如二月の跡をこ我れん

夢窓国師

一物さ如花や老木千如ん

西芳精人言のむの頃夢窓国師此水  
小舟をけけく百韻ま歌信也中

如んやまやま子ぬん

二不法親王

只今小散々をこ我谷乃指をん

のちふれもへまきふもたし

實胤法親王

馴け海も悔ふ花の只かまふん

いふ法くふまきむし毛意

道乎笑言法師

今年か紙花をよまふ高小と  
おとよみは後乃細もいさあふ

殺濟法師

かふいさ花乃雪の夕暮

関白前左大臣家百韻連歌平

りくわしおまもりの夢

大江成種

月小散、花の山風を依りて

赤穂人 身小の響りきりま

膳原高秀

人をきつ便からうは花散と

岩うははあまのしら

舞ふ前を大臣

散々あふ山小を花の散る

まふしやうは心なるり

在途中が義詮

散花踏跡山ありまむらん

春花名神の光と成ぬらん

左近少将義成

おちこもも花を かちこまきしる

こまきぬまのまじり思ひふ

権大僧正常忠

き花のたふあ乃山ろせ

さしなむかげぬあしつた

従二位行家

白く花志野山さくくろ花散る

出やぬ夕の月木間平

前大納言経繼

公法くー小花や散らん

春やいつくも名花ありん

二品法親王

四季に散る花一本花風あり

関中の春もいつかとは南の春

前大僧正晴俊

杉丘の松木間々とし花もふし

いつも〜 終る 別れあるまふ

前大僧正首長

ソ毒散ふに後とふ夕うふ

公々〜 千々〜 二世 世免

善阿法師

花もももさふ小夜 夢涙 夢歌

うも〜 かしら 一つ ちゆまじ

順安法師

散やあきあ〜 ちをふ松の風

久保意法師

明々もえん 毒中をのこせ夕嵐

心〜 風 花 便 小 世 法

前大僧正首長

かまひきくはに散櫻のふか

まゆ風を思ふふふふふふ

称倉院入道 前関白  
右政大臣

散櫻もよきふかへ散るさし

一村乃松好市曾年浪をさる

関白前左大臣

あ〜し子か海花のつきや

関白家百韻を記す

思ふふふかきをさる色

救済也

而小散り花の夕好山おゆし

二勝原宗孝

名越よあまをさるや人のふか二奴

音小おれ後おも花をさるふき

好む里小とまふかあはも好を

源 信 經



日か積 思いさす 華や散る

あつ後をさす ぢふ 春の山里

ふれ 意 却し

庭小 散る 毛小 指の 風うつす

きけ 〓 おとしを かに 花小車

周何 法印

公せと 花見所 ろろ あし

雪平 流り 谷川 乃 春へ

源 信武

風 舞りぬ 而も 花の中ら 散る

雪平 八山 移り 春も 暮る けり

法印 時 齋

花を 志すい ころも や 思しん

おの の ころ ま 日ニ 我 又 人 法 齋

源 尊 朝

以 知 一 枝 花の 法 後 ひと

と、さ、さ、何と人のうらむ歌

源親光

かけさし市下水子花散る

西院さる上るさる山桜

権律師定暹

折さぬ花の白あえ

天曆申時為上折たのことも

山乃花見さるるさる道不木樵

折さるるの折を折く折ふさし

さ折る折をさる

藤原高光

花を折る折る折る折る

源能正朝臣

折るぬまはさるるまはさるる

さるる身はさるるさるる

源義

花の穀、山姥市陰小住人乞

如し跡もなき山里姥庭

勝原時綱

さくく穀、市陰の風亭の亭

文和四年五之閏白家千句

連歌千

多とちをけくろ小飛毛し糸

救濟法師

善哉のち小や ちををを小覽

き、姑小を誦し初瀬路の山

前大納言實氏

河浪の亦穀依花千成千句

山里や何小はけそもくかきん

閏白前左大臣

善哉五之頃之き月、五 服

梅散々其の伊も忘也如千

左近中将義詮

秋の月 華光あり月の  
花散り秋の月 花散り

勝原知春

秋の月 秋の月 秋の月  
月影の影の遠き一行

浄永法師

山行の月 秋の月 秋の月

寛元四年三月法橋寺下

春の月 秋の月 秋の月

舞姫

有明の月 秋の月 秋の月  
人丸の月 秋の月 秋の月

前中納言

柿の月 秋の月 秋の月  
秋の月 秋の月 秋の月

民部卿為勝

飛多川きのふの割ふ鳴く蛙

くふともまゝの歌をこゝろ詠

源氏頼

美の多水の蛙始おすくふ

光りもあふまゝとをこゝろ

素阿法師

山あふき木下つし花鳴く

免くをを松年かゝる法身の法

勝原親長朝臣

○ 春台社歌小ニむりけは法時月日の

連歌年

身のあみ知ちをいの法か

大中臣経員

神垣始おさく松のかけ年ぬえ

昔の法書小心やうくく宛

周阿

勝さく杉葉あをし

山平の如く

源頼基

藤さけハ杉葉花

まはも之流別道之

二品法親王

初子

別道行

伏見院御製

ハ重

加修

山階入道大臣

ハ

ニ

前中納言

かきらるる春能く夜の夕々紫

木能間 妻の侍の乃月

日くふく公つくし能く春の侍

宗能戸まても花の散ぬ侍

別きき春のつとも名能侍

下の心やを能く侍らん

後深州院辯田侍

行春能く侍の能く侍

寛元四年三月能く侍

能く侍の能く侍

京月能く侍

後乃月侍の能く侍

乃月侍の能く侍

常曉法師

古今新古今の昔々小昔々

関白家の千句新古今

思ふやうな女身新古今

救済法

明日も新古今のあきふ昔々

花のうらみと新古今

性急

昔々の人一信ふは紫戸

夢とやいふ花のにもけ

権方綱玄實夏

一昔もこゝい明きるる女一し

うき世もあはれかたあはれ

前右衛門

行幸新あはれも思ふ女日と道新

時一もゆきは夕ぐれの前

後二佐家



信保姫御花のうき世道

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

菟玖波集卷第三

夏連詩

うき世光なき御公案

後光明院前関白  
太大臣

世光中の一花衣

いまきき蝉の聲

民部々為之婚

夏衣々あき袂々あき

寛元三年三月花下蓮歌千

弥生花果花お半花明る

道性あし

神ま侍ら知るのいふやいそく覚

袖乃白ひをうらそくひはり

前大徳玄お家

知の花はく侍歌ふと乃夏こ福毛

道乎笑云法師家の千句蓮歌千

いふやうはひのいそく色

知の花は花の草花らもよき

河のいそく千花を結き結

十佛法也

いそく脚を結夏はまきの蓮梅

を結るを結ましかくいそく

道乎笑云法師

木とくのいそく夏山千

人の許るを慕をにせり公を  
年経く後ふりかひらるる  
書付る事一は

手毎子苦い去りぬ行と

赤染右衛門

あふふふ乃公ち二我あま

け一孝平平生行す孝

妻阿法沙

ホとくを日親おせし子親

花散の福を人やあふ

前右細公氏

ニ新山子まの待るの時

月の明るる而乃夕暮

今上御製

まことまを招なもまの時

つきかくのまをぬる月

従二位行家

子 認いつくのやをまきぬらん

ひきと淋しき雨の音か

後二条院御製

時 多るはきはあまの川の菴

夕 暮のふはれをまきぬらん

前古物を為世

山 かくききあはれをなげ

山の端ちりき月をたこし

権祐朝臣

る ぬれは待し井の時多

たすもらと山都を来たぐこ

後久我太政大臣

五月のやをたをぬらん

雨の降りかき程まききか

数 阿法沙

くはく のこもきりぬ時多

寛文二年三月昆沙の堂の

をのらねまの記

おひくぬ人乃道とぬき

道子生信所

かきよおやすはるもねいし

むよ婦枕乃夢と升あふ夢

順是法所

昔浦をい長き根かゝり引はる

家の月次書に記す

冷泉公政大臣

陣婦くく程あつて平時多

常盤井入道公政大臣

ちがひしちをかのおねりすぬた

嘉暦四年七月七日内裏七十額

のまね記作りしるふ  
前太政大臣

婦き清く軒のあや多風を云

後醍醐院御製

右新清くは年句あきまらる

小崎ふらふ宇治の川より

関白前左大臣

たらまはす白ひくか多風は

たりきふれ人の名は法

前右卿之氏

多らけちあや枝はるは梅少く

西味元年三月清婦ち年句

あやを新まらむまはるは

信忠法師

多ら花はいつと待し時を

ハ幡の空は夏乃あつら

辞意法師

たら花はきね、初はあはる

かけじのぬた音と絶つては

前大僧正道玄

白平目る小山井の園や春あめしん

木かけふい阿あちの花の散るる

藤原民政

朝 雲移がりの草 如きまゝ

水ふふくくくく 駟やとめん

殺済か

五月るの婦を分りて柳の事

のちをもあゝぬお半の友舟

後多お院御製

かきこもるあやえも知ぬまゝ

かきこもる僧尼妻と成りて

後深州院少将内侍

五月る小軒のあやえの事

うはまゝる岩子浪の露跡津

藤原光俊朝臣

せしやいづく白平とる面の二祿

かきくはるは菴かしくも

従二位家隆

五月五日狩ニ終神古酒まきと

をの侍のうく水鏡の聲あめ

前大納言お家

さも明やあき夏のようにこのた

冬の祿まふ鐘をきこゆ

前冬議經宣

明やあき雲路の月ハ秋ハ

風と高ハかきくはる山

藤原長泰

霜とつ小月小夏夏のおを知り

ふ法かきくはる祿の夢

源氏元



月をこぼしうらやみけり 結花夕年

夢の中ふせ集もこぼしけり

左近中将義詮

夏あまのまきふちぬ 薄しき

ふせりて涼しき風と秋を

後光明院 前関白 左大臣

露年月ま川 恋る夏ふけ

たぐひ扇のうちもあつた

後嵯峨院御歌

ちりほふとこたけの花 咲く

うたえがきくもやうくいさか

西園寺入道前右大臣

西風の志けりふち 依姫ゆき

野しまがね浪のふけ

道守 兼法河

ひるあまのまきけり 花小

おもふがとて年いさむ恨に

風りふ夏のまきくす若草ふえ

空ち依星ふかぶうりて

前ち納玄経

巖高きとむのけ小立磨や

菊山為しく大井河の粉のをじ

とま水司のまよふ依ひをこまりせ

かまはうかひえ知りけり依小や河

の中へまきくすことば

龜山院御製

かまきぬいをえらぬ粉の

権中納言公雄

夏と形ぬあふがひ

みしおの月の行場もあぬ

前冬議雅経

粉川が海かけを

きぬく あつぬ毛なし

従二位家隆

此本の戸をさきあふ能の音信々

あはさのまゆこく人なり

権律師家暹

月のいづれも水鏡の影平閑々

有るよ水のこころにせある

殺湊法師

夏川の入江のまるとを互ふと

繪のいれとを如清き夏やゆ

権少僧都永運

岩を舟舟の帆柱輝宵りさ

かゝる舟をやまのかけむ里さつ々

良阿法師

いふゆとくく人をしははかや火

烟子々々き菴乃窓のな

周阿法師

かやうにせむもふたはるのかけふる

北野社千句連歌子

岸まゝに千言けは草那

二不法師五

かもしを思へも志くは断

野を行道をきき深き

花園院御製

日かげさあ山の夕まゝのたまこ

くはあり類も志くはもこ

二務原お長朝臣

山風や夕まゝく成るるん

弘毅為ら女帝のまぢりな扇小

かせぬは

天城のまぢり風の夏よはと何系

弘毅為女御

あはれしとのこぞ思ひあはれおたふ

立やあはれぬ人やあはれん

後嵯峨院御製

さくはくまひのくは川乃夕涼と

八月を人もさき我ちたむらん

後深州院御製

たゞはるる井もたつと

二弘法親王

入るはり影がれとも涼しく

時二我今無きまを思ひ

殺濟法所

かきつあまの香の月の日生た嵩

室治元年三月昆沙門堂始を

ト

志はまきくもくや中(旅衣

無生法所

一むくふ年 神をあらしき

志くし 志くし 志くし 志くし

志原信實朝臣

まのこころを涼しき風吹く

あつくふ見くぬ侍をうき

藤方細金守氏

草花系をけき夏花の志水

夏なき風を松小きこゆ

卜部高前

月けのやうに清水を結あけ

やう夏あうの成りふり

矢多議雅經

かきあふせき入し水の泉川

あつく風も神小涼き夕哉

民部卿為勝

むあひあつく山の井はあ



夕魚乃紫末の玉の清々  
心は海草好まけり乃葉の奈

後嵯峨院御簾

秋あつし知れ誰も知れん

後多の院御時万韻連歌小石ま  
公家小

う我き川別瀬小秋や左女

位二位家燈

風平がが海あゝ乃あし





